

もり きさく たらいばる 『森 喜作 博士と田来原』

～ 森 喜作 博士 ～

群馬県桐生市生まれ。椎茸種菌の人工純粋栽培法「種駒」を発明し、全国の栽培農家から「椎茸の神様」、「きのこの巨人」として親しまれた農学博士です。

(1908年10月4日 ～ 1977年10月23日)

～ 「種駒」発明の原点 農夫の祈り ～

「種駒」の発明の原点は、この田来原の地であった。

森喜作氏は、京都帝国大学(現 京都大学)に在籍中の昭和8年(1933年)農村経済実態調査で、ここ田来原の地に足を踏み入れた。

山の中には、ほだ木(椎茸の原木)が組み並べてあり、角帽をかぶった森氏が見たものは、そのほだ木の前で一人の農夫が手を合わせ、拝みながらつぶやく姿であった。

「椎茸(なば)よ出ておくれ。おまえが出らんば、俺がこの村を出らんばならん。」

このつぶやきは悲痛な叫びであった。

当時の椎茸栽培は、くぬぎやコナラといった原木にナタ目を入れて、後は空中の椎茸の胞子の癒着(ゆちゃく)を待つばかりの方法で、天任せ風任せといった神がかり的なものであり、収穫は不安定で、いわば危険な「かけ」であった。

田来原の地で「椎茸(なば)よ出ておくれ」と祈る農夫の姿に胸を打たれ、種駒開発の志を立てた森氏は研究を重ねました。

昭和17年(1942年)、幾多の困難を克服し、椎茸の雌雄の胞子を結合させる、革命的方法で「人工栽培法」に成功しました。



写真: 森喜作氏の銅像と紹介板



写真: 森喜作氏の指を指す方角は群馬県桐生市

～ 「種駒」誕生 ～

ある日、散歩の途中に将棋を楽しむ様子からその駒を見てヒントを得て、三角形の楔形(くさびがた)に雌雄の胞子を植え付け、ほだ木に打ち込んだ。

予見は的中し、椎茸の大量生産をもたらす「種駒」が誕生した。

この「種駒」は、真っ先に田来原の農夫にプレゼントしたとして、美談がこの田来原の地に残っています。



写真: 森喜作氏

～ 日本の三大発明 ～

この森氏のエピソードは、1960年代(昭和35年頃)初め、小学校六年生向けの国語の教科書に「いたけさいばい」として取り上げられ、多くの子供達にも紹介され、映画にもなりました。

この田来原の地が起源となった森氏の種駒の発明は、真珠養殖の御木本幸吉氏、ヒメマス養殖の和井内貞行氏とともに、農林水産分野での『日本三大発明』といわれています。